



生き生きとした自分を見つめるための実用生活誌

はじまりのページ

Shukokai-Magazine The page of beginning

2020 Spring NO.50

新春 特別インタビュー

ダイジェスト版

がんを克服して 人生を生き抜く

～“人生100年時代”のがん管理術～

The Note from China Vol.2

中国からの手記 第2回

かける価値のある 冒険

～妻に日本で新しいがん治療を受けてもらう～

新春 特別インタビュー

がんを克服して 人生を生き抜く

～“人生100年時代”のがん管理術～

“人生100年時代”という言葉が登場したのは、世界最高位と称される「ロンドン・ビジネス・スクール」の教授リンダ・グラットン氏とアンドリュー・スコット氏の著書『LIFE SHIFT (ライフ・シフト) 100年時代の人生戦略』(東洋経済新報社 2016年)の紙上でした。——おおよそ100年前の1914年生まれの人が100歳まで生きる確率はたったの1%。しかし、世界的な長寿化が進捗し、先進国においては2007年生まれの50%の人が103歳まで、日本では107歳まで生きるといいます。こうした人生100年時代を健康に過ごすために必須なのが「がんにならないために何をすればよいのか」「がんになってしまったら何をすればよいのか」という知識ではないでしょうか。今回の特集は、健康長寿に必須な“がん管理術”を、米国法人蓮見国際研究財団理事長の蓮見賢一郎先生にお伺いしました。

Series Essay
思いの言の葉

Vol.44

“はじまりの年”に思う

蓮見賢一郎 医療法人社団 珠光会 理事長

むかしむかしのお話……。ある年の暮れ、神様が動物たちを集めて「元旦に、新年の挨拶にいらっしゃい」といいました。「早く着いた順に、1番から12番までのものを、年替わりで動物の大将にしてあげましょう」

それを聞いた牛は「僕は歩みがのろいので、一足先に出掛けよう」と、まだ夜明けも遠いうちに出発しました。その慎重さが功を奏し、神様の宮殿に着いたとき、ゴール前には誰も姿を現していませんでした。

「やった、僕が1着だ！」牛が喜び勇んで進もうとしたとき、小さな影がサツと飛び出して、ゴールを切っ飛ばしました。ネズミでした。牛の背中に隠れていて、ゴール直前に登場したのです。

「私が1着です！」と胸を張るネズミに、神様は「では、君を年替わりの最初の大将にしてあげましょう」

と宣言しました。こうしてネズミは十二支のスタートを告げる動物になったのです。なじみ深い「縁起物語」の通り、今年の干支はネズミ。12年に1度巡ってくる“はじまり”の年です。

今年珠光会が注力するのは、中国・ドイツなどの各国で予定されているHITV療法の研究と臨床試験です。

HITV療法については、2018年に臨床

データを更新しましたが、第4期・再発のがんにもかかわらず、すべての受診者において30%を超える患者様の腫瘍が消失し、腫瘍減少も含めると、42%近くの患者様の病態に改善が見られました。また、進行がん別の治療2年後の生存率では、大腸がんが約82%、乳がんが約92%、肺がんでは約64%という成績を上げています。今回実施する試験で、一層精密なデータを得たいと考えています。

さらに、ハスミワクチンに関しても、利便性を高めるための方策を検討したいと思っています。注射が苦手な人に対して、精神的な苦痛を軽減させるためにはどうしたらいいのか、東京のBSL-48珠光会Clinicへ来院しづらい人をどうフォローすればいいのか……等々、患者様目線での有益な対応を模索したいと考えています。

今年もがんで苦しむ人を救済するために、精一杯努力する所存です。みなさまのご助力を賜りましたら、これ以上の幸福はありません。

ちなみに、ペットの数ではイヌを抜いたネコは十二支に入っていませんが、ベトナムではネコ年というのがあるそうです。ウサギ年の代わりだそうですから2023年でしょうか。ネコ年のカレンダー、ちょっと見てみたい気がします。

兎にも角にも、今年がみなさまにとって実り多い年になりますように。みなさまの幸福と健康を心よりお祈りしております。

CONTENTS

- 2 思いの言の葉 Vol.44
“はじまりの年”に思う
- 3 新春 特別インタビュー
がんを克服して人生を生き抜く
～“人生100年時代”のがん管理術～
- 8 Healthy Advice
もう1歩健康になる
アドバイス
1月から3月にかけて注意したい病気メモ
～冬を健康に過ごすための傾向と対策～
- 12 連載コミック
第45回 ほのぼの JiJi・BaBa 松 & 梅
- 13 中国からの手記 第2回
かける価値のある冒険
～妻に日本で新しいがん治療を受けてもらう～
- 19 珠光会通信

図2 「自然免疫」と「獲得免疫」の仕組み

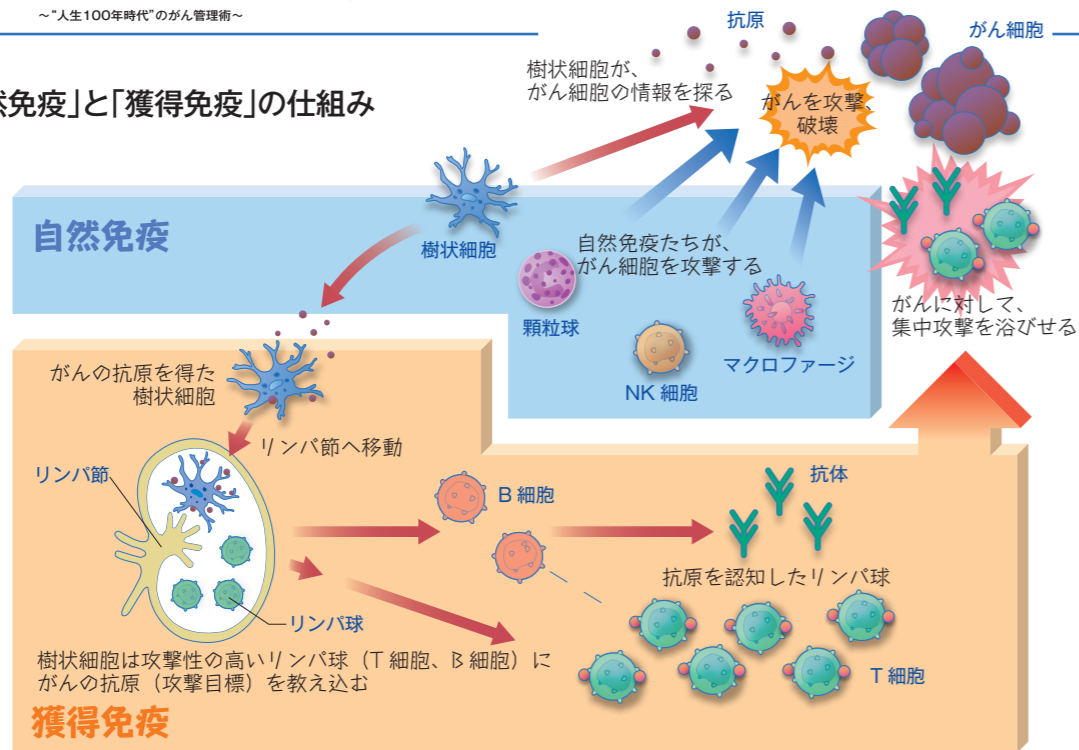
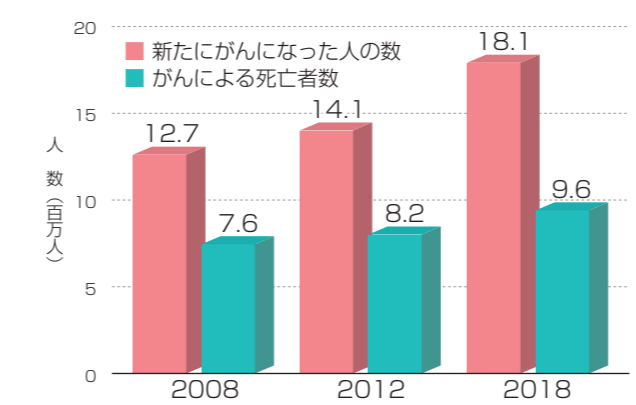


図1 世界におけるがん患者数の推移



出典：Trend in the number of cancer patients globally. Source: Bray F, et al. CA Cancer J Clin 2018;68:394-424; Parkin DM, et al. CA Cancer J Clin 2005;55:74-108; Jemal A, et al. CA Cancer J Clin 2011;61:69-90; Torre LA, et al. CA Cancer J Clin 2015;65: 87-108. c American Cancer Society.

がんは健康長寿の高いハードル

2019年7月に厚生労働省から発表された、日本人の平均寿命は女性が87・32歳、男性が81・25歳……。女性は6年連続、男性は7年連続で過去最高を記録しましたが、日本人の寿命は着実に伸展しています。反面、国立がん研究センターは2007年に、2人に1人はがんになり、3人に1人はがんで亡くなる、という推計値を出しています。長寿を健康に全うするためには、がん対策が欠かせないということですね。

蓮見先生「その通りです。実は近年、がんの

罹患率や死亡率は世界的に見れば増加傾向にあります。

国際がん研究機関 (International Agency for Research on Cancer: IARC) によると、2018年に世界でがん罹患した人は約1810万人。がんによって死亡した人は約960万人とされています。同機関は過去にも同じ調査を行っています。比較していただければ、がん罹患患者数・死亡者数の増加は一目瞭然でしょう(図1)。

ただ、日本の場合、昨年12月に国立がん研究センターが、2010年から11年にがんと診断された人の5年生存率が、全体で0・3ポイント改善されたと発表しています。がんの事情は各国、特に先進国と発展途上国では異なりますが、健康長寿の高いハードルであることは、疑うべくもありません。

蓮見先生は日本における免疫療法のトップランナーとして、「ハスミワクチン」「H1-TV療法」など、多様な治療法を駆使してがんと闘ってこられました。がん対策としての免疫療法、健康長寿における免疫の役割などについてお聞かせください。



米国法人 蓮見国際研究財団理事長
蓮見 賢一郎先生

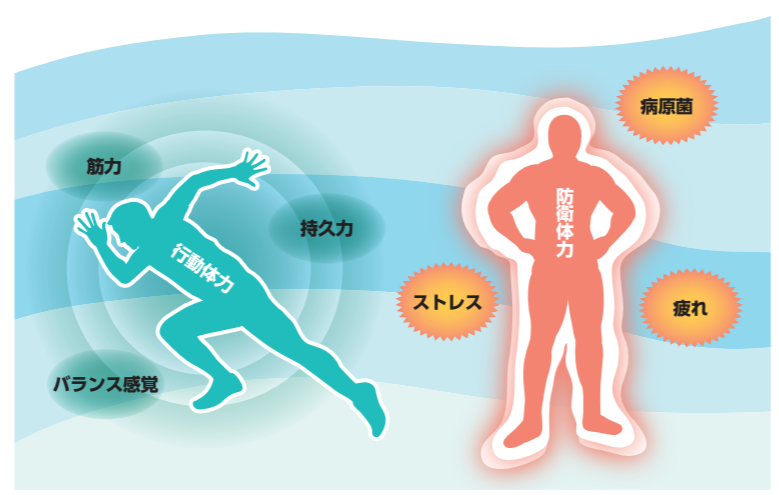
体力は免疫力を高める鍵

情報を伝達したりする役目を担っています。がんなどの強力な相手には、獲得免疫が対抗します。所属する細胞はT細胞、B細胞など。2つの免疫システムは互いに補いながら、ワンチームとして異物と闘っているわけです(図2)。

免疫システムの作用力は、一般に「免疫力」といわれます。免疫力が高ければ高いほど、がんなどの病気になりにくいとされていますが、免疫力の強弱はどのようにして計るのでしょうか。

蓮見先生「今のところ、免疫力を計る単位はありません。NK細胞などのリンパ球の活性や細胞数などを調べ、それをもって免疫力だとする場合があります。確かにそれは免疫力の一端ではありますが、すべてではありません。例えば「体調」という概念が、体温や拍動などのバイタルから内臓機能や脳内環境など、あらゆる生体反応の総和であるのと同じく、免疫力も免疫細胞の活性や体内環境の有様など、さまざまな要素の総和なのだと思います。だからこそ、免疫力を高めるアプローチはひとつではなく、複数あるわけです」

図3 「行動体力」と「防衛体力」



さまざまな要素の総和なのだから、それを強化する方法もさまざまある……ということですね。具体的にどうすれば、免疫力を高く保っていられるのでしょうか？

蓮見先生「私は常々「免疫力」と「体力」は、免疫システムの裏表だと思っています。体力があれば免疫力も高まり、体力が落ちれば免疫力も低下する——ということです。体力は「行動体力」と「防衛体力」に分けられます。行動体力とは、運動するため

蓮見先生「免疫とはいうまでもなく、体内に生じた、あるいは入り込んだ「異物」を排除するために、私たちの体に備わった巧妙なシステムのことです。生まれながらに持っている「自然免疫」と、高度な生命体のみに備わった「獲得免疫」とがあり、人間はこの2種類の免疫システムで異物に対抗しているわけです」

2つの免疫システムは、どのような役割を担っているのでしょうか？

蓮見先生「自然免疫は「初期防衛ライン」です。所属する免疫細胞の単球、顆粒球、NK細胞、樹状細胞などが常に体内をパトロールしており、異物を発見すると、それを飲み込んで処理したり、攻撃担当の細胞に「敵」の

※1 国際がん研究機関 (International Agency for Research on Cancer: IARC): 世界保健機関 (WHO) の外部研究機関。本部はフランスのリヨン

の体力のこと。体を動かすために必要な身体能力を指します。そして、防衛体力とは、健康な生活を維持するための体力のこと。外的環境や病原菌、ストレスなどから心身を守る抵抗力を指します(図3)」

——免疫力の向上という意味では、まず防衛体力を高める……ということですね。

蓮見先生「防衛体力は血圧や総コレステロール量、肥満傾向など、いわゆる生活習慣病の値でおおよそ把握することができます。逆に考えれば、生活習慣病に陥らないために日々注意しなければならぬことが、すなわち防衛体力を強化する方法であり、免疫力を高める処方でもあるわけです」

——具体的にはどんなことでしょうか？

蓮見先生「生活習慣病対策は、大きく「食事」と「運動」に分けられます。食事に関しては主食・主菜・副菜を組み合わせた「栄養バランス」の取れた献立を規則正しく摂ることを心がけてください。

運動は厚生労働省が定めた「健康づくりのための身体活動基準2013」によると、18歳から64歳までの身体活動量の基準は普通歩行、掃除、早歩き、犬の散歩、階段を早く上がるなどの生活活動を積極的に行う、となっています。1日の目標歩数は8000歩から10000歩です。

効ですが、私の認識としては、ICVS東京クリニックで施術されているpre HITV(プリ・エイチ・アイ・ティ・ヴィ)療法^{※3}がもっとも効果的な方法だと思えます」

蓮見先生「まずは、自分の病期を理解することが重要です。ケースバイケースではありますが、目安として第2期までなら主治医の指示に従って大丈夫でしょう。しかし、第3期以降なら、どんな治療を受けるのかを自身で判断する必要があります。受け身でいるばかりでなく、ご自身が受診する治療についてきちんと理解し、納得して治療を受けることが大切です。納得して治療を受けるためには、医師とのコミュニケーションが不可欠ですし、コミュニケーションを取るためには、治療に対する知識が必要でしょう。

蓮見先生「現在200名ほどの方が受診しています。pre HITV療法が臨床を開始して4年になりますが、第3期などハイリスクの人が多数いるにもかかわらず、がんが発症、あるいは再発された方は、まだ一人もおりません。

■治療効果を高めるために「知識」を持つ

——ここまでがんを予防するという観点から、日常生活で取り組めることを中心にお話を伺ってきました。次に「がんになってしまったらどうすればいいのか」という点からお尋ねしたいのですが、医師から「あなたはがんです」と告げられたとき、私たちは何をしなければならぬのでしょうか？

1992年に完了した埼玉県立がんセンターの調査によると、NK細胞の活性は生活習慣病の影響を大きく受けるそうです。2892名について90項目の生活習慣とNK活性の関連を調べたところ、NK活性は喫煙によって低下し、飲酒によって高まるといえます。また、食事関連では緑色野菜と大豆製品、肉、乳・乳製品などの高たんぱく食品がNK活性を高めるそうです。身体活動との関連でいえば、1日平均3時間以下の定期的な労働が活性を高め、それ以上の労働、あるいは労働をしない場合は活性が低下することがわかっています(図4)。

図4 NK細胞の活性化に影響を及ぼす日常生活

- 1 喫煙によって活性が低下する
- 2 飲酒によって活性が高まる
- 3 緑色野菜と大豆製品、肉、乳・乳製品などの高たんぱく食品が活性を高める
- 4 1日平均3時間以下の定期的な労働が活性を高める
- 5 1日平均3時間以上の労働、あるいは労働をしない場合は活性が低下する
- 6 睡眠が不規則な人、不規則な食事をする人は、規則的な人に比べて活性が低い
- 7 肥満、痩せといった適正体重からのずれも活性化を低くする

出典：埼玉県立がんセンター「地域コホートによるがん発症主要因の免疫・分子疫学的研究」(1992年度完了)をもとに作成

体力があればあるほど免疫力も高くなると思いますので、余裕のある人は行動体力を強化することをお勧めします。行動体力は筋力、持久力、柔軟性などから成るので、腕立て伏せやスクワット、ジョギング、ウォーキングなど、自分の生活スタイルに合ったトレーニングを無理なく取り入れてください」

——生活習慣病予防の生活が、つまりは免疫力を高める処方箋だということですね。がんを予防するという見地から、他にどんな方法があるのでしょうか？

蓮見先生「免疫システムの異物に対する監視体制を強化する」ということですね。具体的には、NK細胞を活性化させる方法として、樹状細胞を活性化させる方法があります。

NK細胞に関しては先ほどから述べている通りですが、食事に関して付け加えるなら、キノコやイモ類、穀物などの多糖類を多く摂るようにしてください。サプリメントで不足しがちな栄養素を補うことも有効です。

日常的なレベルで樹状細胞を活性化させるには、定期的なアジュバントの投与が有

のスタッフへお尋ねください。ウェブサイト「免疫療法コンシェルジュ」(https://wellbeinglink.com/)にも有用な情報が記載されていますので、ご活用くださいませように」

——蓮見先生が、患者さんを治療する上で、大切に思っていることがあったら教えてください。

蓮見先生「私は患者さんに治療の状況を説明するとき、患者さんと医師との関係を、登山家とシェルパに例えることがあります。患者さんは登山家のように、長い治療の道のりを、治療という頂(いただき)へ向かって歩き続けねばなりません。医師は登山家に付き従うシェルパとして、もっともリスクの少ない道程を示し、登山家が疲れたら休養を取れる場所を作り、場合によっては彼を背負ってでも前へ進みます。

治療の全工程を俯瞰し、自分は現在どんな治療を受けており、それは全体の何合目にいるのか……ということを理解していたことで、患者さんの不安が少しでも解消できれば嬉しいですね」

——二人三脚で歩める医師と出会うためにも、がん治療に関する知識を深めることが重要ですね。本日は貴重なお話を聞かせていただき、ありがとうございました。

※3 preHITV療法:次世代型免疫療法「HITV療法」をベースにした、樹状細胞を用いたがん予防セラピー

※2 アジュバント:主剤の効果を増強したり補助したりする目的で併用される物質・成分の総称。ハスミワクチンに用いられているアジュバントは高性能であり、このアジュバントをがん予防、健康増進などのために用いる療法をアジュバント療法と呼ぶ

冬場に増加する——
食中毒

意外に思われる方もいらっしゃるでしょうが、食中毒は冬場に多発しているのです。原因の多くはノロウイルスで、感染の報告は、ほとんどが11月から3月。ノロウイルスもインフルエンザウイルスと同様に低温、乾燥を好むので、流行時期が重なるのです。

◆潜伏期間は長くて2日

体内に侵入したノロウイルスは小腸で増殖し、腹痛、下痢、吐き気、嘔吐といった症状を引き起こします。

潜伏期間は12時間～48時間。高熱は出ませんが、免疫力が低下していると、重症化することもあるので注意が必要です。高齢者や幼児が、吐いたものをのどに詰まらせて死亡する例もあります。

◆自己判断で服薬しない

ノロウイルスによる食中毒を予防するには、すべての感染症対策に共通することですが、こまめな手洗いが重要です。手のしわや、爪の内側に原因菌が潜んでいることもありますので、外出から戻ったとき、トイレを使ったときにはていねいに手を洗ってください。

冬はカキのおいしい季節ですが、カキをはじめアサリ、ホタテなど二枚貝の内臓にはノロウイルスが蓄積されていることがあり、生食には注意が必要です。できれば加熱処理をして食べることをおすすめします。

食中毒にかかってしまったら、有効な薬はありませんので、脱水症状を起こさないように、適度に水分を補給しながら安静を保ってください。水分がとれないような状態であれば、病院での点滴治療が必要になりますので、すぐに医療機関を受診してください。

下痢がひどいからといって、下痢止めを服用すると、ウイルスが排出されずに腸内に留まってしまうため、かえって回復が遅くなる場合があります。薬を飲むかどうかは自己判断で決めるのではなく、医療機関に相談してください。

吐しゃ物や排泄物には、大量のノロウイルスが含まれている可能性があります。すばやく処理し、吐しゃ物などが付着した場所は、殺菌剤で消毒することで感染を防いでください。



Healthy Advice.
もう1歩**健康**になる
アドバイス

1月から3月にかけて
注意したい**病気**メモ

～冬を健康に過ごすための傾向と対策～



ただでさえ免疫力が下がりがちな冬場——。猛威を振るう病気に対抗するためには、“敵”の情報をあらかじめ収集し、対策を講じておくことが必須です。1月から3月にかけて注意を要する病気の知識をまとめました。健康に過ごすうえでの参考にしてください。

最も注意しなければならない——
インフルエンザ

インフルエンザウイルスにとっては、温度20℃以下、湿度20%前後が最適の環境。一気に感染が広がります。温度・湿度に注意しつつ、免疫力を高めてインフルエンザ対策を——。

◆感染力が強いのはA型

インフルエンザウイルスにはA型、B型、C型の3型があり、毎年流行するのはA型かB型です。

A型はとても感染力が強く、世界的に大流行することもあります。38℃以上の高熱、頭痛、関節痛、筋肉痛、倦怠感など、全身的な症状が出ます。インフルエンザという言葉でイメージするのは、ほとんどの場合A型です。

B型は、感染力は強いものの高熱が出ることはあまりありません。抗体をもっている方が多いので、A型のように流行することは少ないといえるでしょう。

C型は感染力が弱いので、流行することはほとんどありません。

◆手洗い・うがいで感染経路を断つ

インフルエンザ対策は「予防」がすべてといっても過言ではありません。まずは早めに予防接種を受けることです。

ただ、予防接種も絶対ではありません。インフルエンザにかかりにくくなったり、重症化しにくくなったりすることが予防接種のメリットですので、過大評価は禁物です。

より確実に予防するためには“感染経路”を断つこと。こまめな手洗いやうがいを心がけましょう。

また、暴飲暴食、偏食など食事のバランスが崩れたり、睡眠や運動が不足したりすると免疫力が低下しますので、インフルエンザにかかりやすくなります。毎日の生活には十分に注意してください。

かかってしまったら、早めに医療機関を受診してください。早期に抗インフルエンザ薬を用いれば、軽い症状ですむ場合も少なくありません。できるだけ安静にし、熱があるときには、水分の補給も忘れないようにします。また、外出は控え、まわりに感染を広げないようにすることが大切です。



しゅうとく おちい
重篤な事態に陥る場合も——
脳梗塞

脳梗塞が冬場に多いか夏場に多いかは議論が分かれるところですが、国立循環器病研究センターによると、75歳以上の高齢者で心臓に原因がある脳梗塞は、冬場に多く発症しているとのこと。重篤な後遺症が残ったり、命を失ったりする脳梗塞——。特に冬場は、どんなことに気をつければいいのでしょうか？

❖冬は血管が収縮しやすくなる

脳梗塞は、脳の血管が詰まったり血流が悪くなったりして、脳細胞が壊死してしまった状態をいいます。

寒い冬は血管が収縮します。体温が下がるのを防ぐため、血管を収縮させて血流を速くするのです。

冬場はあまり水分もとりません。そのため血液はドロドロになりがちです。狭くなった血管をドロドロの血液が流れれば、自ずと血管は詰まりやすくなってしまいます。

❖血管を健康に保つ

脳梗塞を予防するには、血管を健康に保ち、血液をさらさらにすることが重要です。

食生活では、塩分を少なくすることで高血圧を防ぎ、コレステロールをコントロールする栄養素を多く含むサバやイワシ、サンマといった青魚をふんだんにとってください。納豆も、血液をサラサラにするのに、とても効果があるとされています。水分不足にも注意をしてください。

日常生活に注意すると同時に、脳梗塞には必ず前兆がありますので、日々自分の健康状態をチェックすることも大切です。

前兆としてよく起きるのは、「手足の力が急に抜ける」「片方の手や足がしびれたり、動きにくくなって、つまづくことが多くなる」「片方の目が見えにくい」「ろれつが回らない」「言葉が出にくい」といった症状です。そんな症状を覚えたら、すぐに病院で検査を受けたほうがいいでしょう。

早期に発見して処置することで、深刻な状態に陥ることを防止できます。



高齢者は注意——
ヒートショック

温度差による血圧変動で起こる心臓や血管の疾患をヒートショックと呼びます。特に冬場は、暖房のきいたリビングから寒い脱衣所に移動し、熱いお風呂に入るときなどに、血圧が乱高下しやすくなります。それがヒートショックの引き金を引く原因になるのです。

❖死亡数は交通事故の5倍

ヒートショックを起こしやすいのは65歳以上の高齢者、高血圧や糖尿病の方、動悸や不整脈がある方、睡眠時無呼吸症候群の方、熱いお風呂が好きな方、お酒を飲んだあとにお風呂へ入る習慣のある方——というデータがあります。

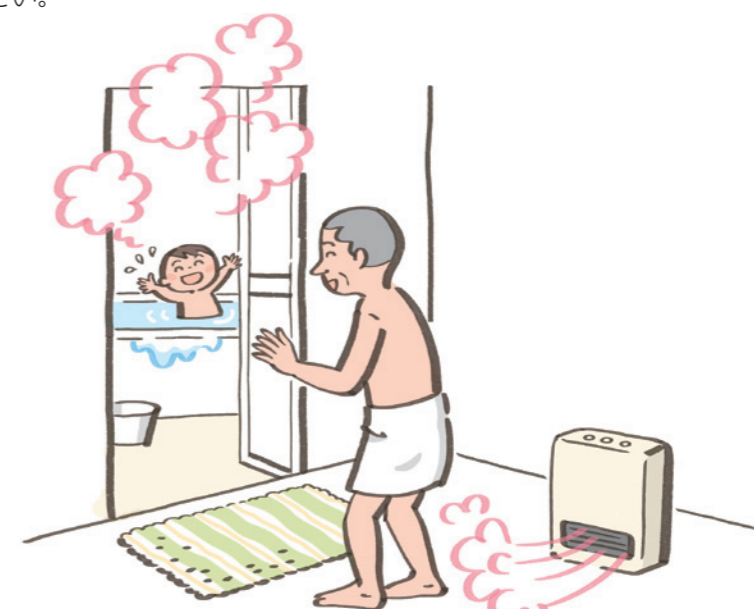
ヒートショックによる入浴中の死亡数は、交通事故による死亡数の約5倍にもものぼるそうです。その半数以上が、冬場に集中しています。

❖温度差に要注意

ヒートショックを防ぐには、急激な温度変化を避けることです。温かい居間から冷えた廊下やトイレ、お風呂場の脱衣所などへ移動したときが危険です。特にお風呂は、いったん冷えたあと、湯につかって温まりますから、血圧が大幅に上がったたり下がったりして、心臓や血管に大きな負担がかかります。

暖房のきいた部屋ときいていない場所との温度差は、3℃～5℃が適切だとされています。できれば脱衣場にも暖房器具を置いたほうがいいし、もし置けなければ、お風呂のふたを開けたままにして、湯気で脱衣所を温めるようにしてください。お湯の温度も高すぎるのは禁物です。40℃くらいに設定しておいて、きちんとかけ湯をして、体をお湯にならしてから湯船に入ってください。

長風呂も避けたほうが無難です。お湯から上がるときも、ゆっくりと立ち上がってください。入浴の前にはコップ1杯の水を飲むことで、水分不足による高血圧を防げます。お酒を飲んだあとの入浴も控えるようにしてください。



The Note from China Vol.2

中国からの手記 第2回

かける価値のある冒険

～妻に日本で新しいがん治療を受けてもらう～



作：陳 俊生(仮名)
 翻訳：中島 晨紅(蓮見癌研究所)

前号に続き、中国からICVS 東京クリニックへ送られてきた手記を掲載します。今回手記を綴ってくれたのは、浙江省で公立病院の院長を務めた経験を持つ陳さん。肺がんと診断された奥様の治療法を懸命に探し求めた末、ようやく出逢ったのがHITV療法だったのです。

第45回

ほのぼのJiJi・BaBa

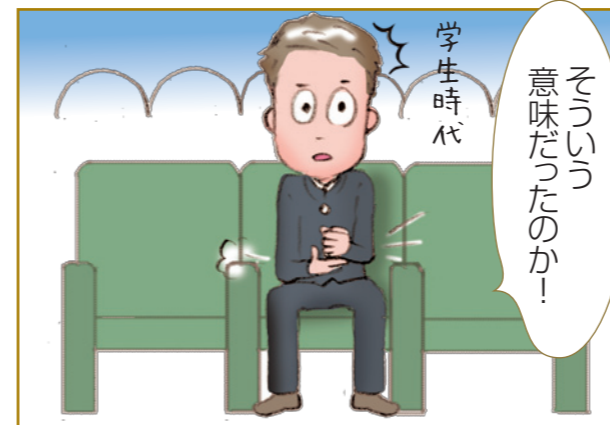
松 & 梅



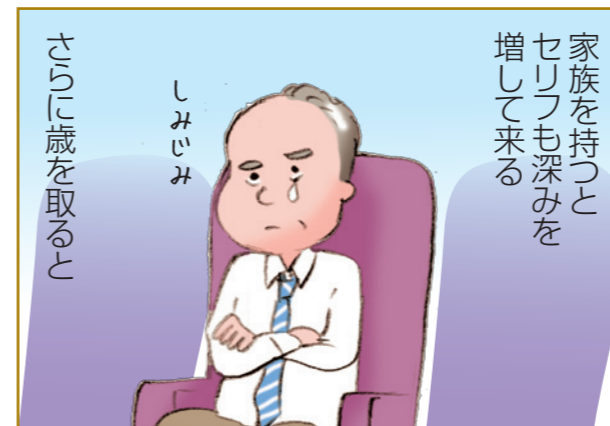
映画



映画は昔みたときと
 今とでは感じ方が違う



そついう
 意味だったのか！



家族を持つと
 セリフも深みを
 増して来る



初めてみたかのような
 新鮮さがある

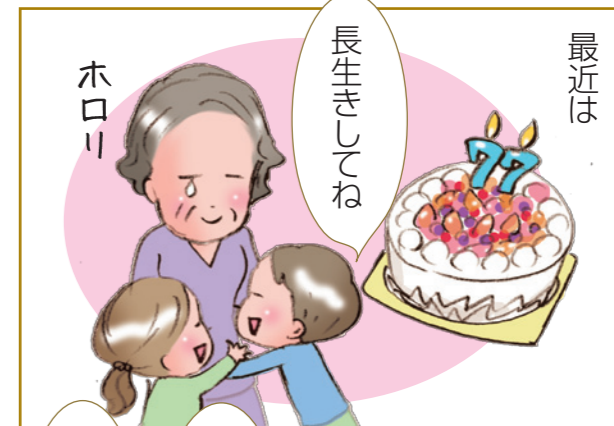
誕生日パーティー



家族が誕生日
 パーティー
 してくれるのよ

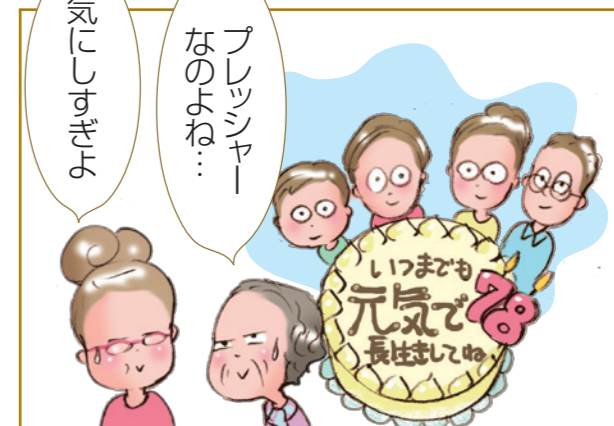


最初のうちは
 感動してたけど



最近
 は

長生きしてね



プレッシャー
 なのよね...

気にしすぎよ

Prologue

2018年の9月27日は、私にとって悪夢のような一日でした。その日の午前、会社の健康診断の結果を聞くため病院へ行った妻が、医師から非小細胞性肺がんと子宮内膜がんを併発していると告げられたのです。しかも、すでに一部骨転移しており、病期は第4期だと……。

私は整形外科医であり、かつては浙江省紹興市にある公立病院の院長を務めていました。仕事柄、生死に直面することは日常茶飯事です。家族のことになると話は別です。妻から検査結果を知らされたとき、58歳というベテラン医師であるにもかかわらず、私は衝撃のあまり愕然^{がくぜん}とその場に立ち尽くしました。

妻はどんなことも真面目に対応するタイプでした。実はがんと診断される数か月前、我が家はリフォーム工事で、こ・舞・い・で・した。妻は銀行の財務課長として多忙を極めていたにもかかわらず、工事に関する諸々を一手に引き受けてくれたのです。

——もしかししたら、多忙から生まれた疲労やストレスが、がんを芽吹かせ、悪化させてしまったのか……?!

そう思うと、悔しくて仕方ありませんでした。ましてや、私は医師です。なぜ予兆が見

抜けなかったのか……。私は無念の思いに打ち震えました。

どんな治療法を選ぶべきか……。それは、私たちの30年以上に及ぶ夫婦生活のなかで、最も重要な問題となりました。

がん治療が非常に困難なことは十分承知しています。妻の苦痛を軽減するにはどうしたらよいか、生活の質を保障するために適切な方法とは……。

私は懸命に考え続けました。しかし、答えは出ず、疲れ切った脳裏を同じ問いがぐるぐると回り続けるのみでした。

Act1.

奔走する日々

妻は医学に関してはまったくの素人なので、夫であり医師である私に、全幅の信頼を寄せていました。

私は現状を慎重に検討し、まず病気の進行を抑制するため、妻に地元の専門病院で化学療法を受けてもらうことにしました。と同時に、私は半月の休暇を取り、すべての検査報告書を抱えて上海、杭州などで活躍するがん治療の専門家を訪ねました。全員が同業者たちに紹介してもらった一流の医療者たちです。浙江省腫瘍病院を訪れたのは、午前11時頃

でしたか……。目当ての医師がいる診療室の

待合は、診察を待つ患者さんで溢れ返っていました。医師には私の訪問日を知らせていませんが、診察優先ということで、アポイントメントまでは取れませんでした。私は彼が昼食のために部屋から出てくるまで、待合室の片隅で3時間近く待ち続けました。

上海へ赴いた^{おもむ}ときは、一日に4つの病院を駆け回り、7名を超える専門家との面会を果たしました。

医師たちの見解は大体同じ。「遺伝子検査をしたのち、分子標的薬の治療を受けるように」という提案です。遺伝子検査の正確性は、正しく分子標的薬の選択と治療効果に反映される——。専門家から検査の重要性を説かれた私は、高い技術を擁する浙江大学附属第一医院で、妻に遺伝子検査を受けてもらいました。

抗がん剤治療を2コース受診したのち、分子標的薬を受けることにしました。しかし、それで万全だという気はまったくせず、先が見えぬ思いに、ただ不安だけが募つていきました。私は衝き動かされるように、さらに効果的な治療法を探し求めました。

そんなある日、大学の同級生の奥様から有力な情報もたらされました。彼女は杭州市の病院で院長を務めており、仕事の関係で

JIMSサポート株式会社(以下JIMS)とつながりがありました。JIMSは日本の「ICVS東京クリニック」の中国における窓口の役割を果たしています。彼女が薦めてくれたのはICVS東京クリニック院長の蓮見賢一郎先生が開発した「HITV療法」でした。

彼女は「HITV療法は免疫療法を中心に据えた複合的ながん治療であり、進行がん及び再発がんに対し、高い治療効果を発揮している」と説明してくれました。

まさに「薬にもするがる思い」。私は彼女の助けを借りて、JIMSに連絡を入れました。妻の検査資料を日本語に翻訳してもらい、ICVS東京クリニックの蓮見先生に送付したのです。

蓮見先生の医療チームが妻の資料を慎重に検討した結果、書簡で「当該患者様はHITV療法を受診することが可能です。中国国内で化学療法を続けながら、日本でHITV療法を受けたい。がんが治癒する可能性はあります」と回答してくださいました。

書簡にあった「治癒」という2文字が、私の心を揺さぶりました。

今まで相談した専門家は、誰も「妻の病気を治せる」とは言ってくれませんでした。もちろん、私も医者ですから、うかつなことは口に出せない気持ちは理解できます。

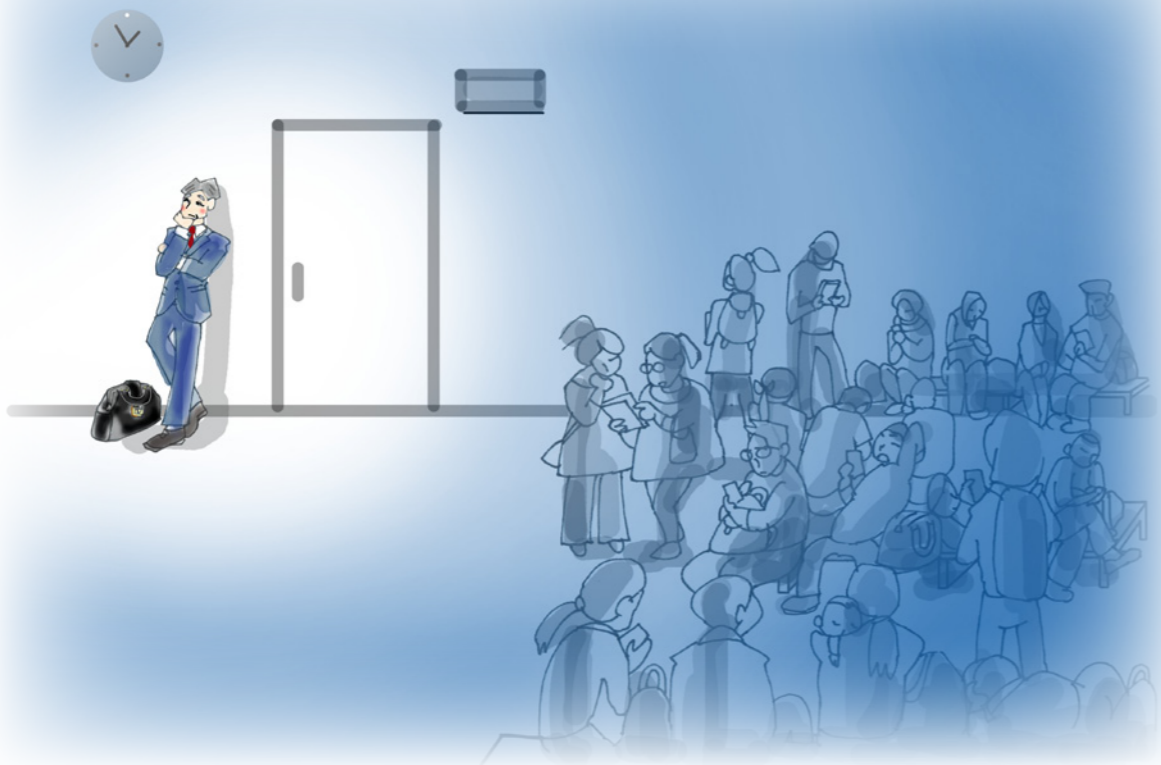
私は蓮見先生の回答の真偽を、JIMSに質しました。すると、事務所スタッフは「蓮見医師は、いつも慎重な発言に終始する人なので、今回の回答は治療効果に対して一定の自信がある、という意味だと思います」と答えてくれたのです。

外国で治療を受けることは、私たち夫婦にとって大きな負担であり、何をどう選択するのがベストなのか……日々葛藤の連続でした。

——第4期のがんを通常の治療で治癒させるのは非常に困難。にもかかわらず、「治せる可能性がある」という治療法が存在するのなら、試してみる価値はある。いや、苦労ばかりで結局大した成果は上がらないのでは……。

明と暗の言葉が浮かんで消えました。決断を下すまでの数日間は、私の生涯を通じ最も悩み多き時間だったといえるでしょう。

「免疫療法」についての知識を補うため、インターネットで調べてみました。すると、



2011年のノーベル生理学医学賞の受賞者が、免疫学において大いに貢献した米国、フランス、カナダの3名の科学者だったこと、そして、2018年のノーベル生理学医学賞の受賞者が、日本と米国の免疫研究者だったことがわかりました。免疫療法は手術・放射線・抗がん剤に並ぶがん治療法として、大きなポテンシャルを持った治療法だったので。

Act2. 生を求める旅

2018年11月11日、私は妻に付き添って日本へ旅立ちました。しかし、その時点での私は、依然HITV療法に対して慎重な態度を保っていました。

HITV療法の中核となるのは「樹状細胞」という免疫細胞です。樹状細胞は免疫システムの司令塔ともいわれる細胞。がん細胞を認識し、攻撃担当の免疫細胞に、ターゲットとなるがん細胞の情報を「手配書」のように伝達する働きがあります。

蓮見先生は患者さんから採取した樹状細胞

のもととなる細胞を、CPC（細胞培養室）で培養。調整した樹状細胞を病巣に直接注入、あるいは動脈、静脈に注入します。

樹状細胞をダイレクトにがん細胞に触れさせることで、敵の情報をぎめ細かく学習させるのです。樹状細胞は学習した情報を、高い攻撃力を有するCTL（細胞傷害性T細胞ⅡキラーT細胞）に伝達。CTLは体内に存在するがん細胞を索敵し、発見と同時に的確な攻撃を仕掛けるのです。

日本滞在中、妻は最新の放射線治療であるトモセラピー（強度変調放射線治療ⅡIMRT）も受けました。

トモセラピーは、腫瘍への高い線量を集中・均一性を保持しながら、正常細胞への被ばくを抑制できる特徴があります。正常細胞へのダメージを低く抑えつつ、がん細胞へ鋭い攻撃を浴びせられるのです。HITV療法の一環として高い治療効果を発揮します。

HITV療法の治療プロセスにおいて、私は非常に緊張した瞬間を2回味わいました。

1回目は、培養された樹状細胞を上行大動脈へ注入するため、注射針を妻の胸部の中央、胸骨よりやや左側の位置へ刺した瞬間――。

上行大動脈は血液循環の大元となる動脈ですから、注入した樹状細胞を、人体の各部位へ

効果的にデリバリーすることが可能でしょう。

しかし、注射の位置があまりにも心臓に近いので、万が一うまく打てなかつたら、突発的な危険が生じやすい……。どんな些細なミスでも重大な結果を招くことになり兼ねないので、豊富な臨床経験のある医師以外では、この部位に注射針を刺すのは、とても難しいと考えたのです。

2回目の緊張は、蓮見先生が樹状細胞を骨に転移した腫瘍へ注入したときでした。骨転移の大きさはコメ粒の半分くらい……。そんな微小な病巣に対し、蓮見先生はミスなく処置を施せるのか……。医師だからこそわかる繊細なミッションです。私は不安を募らせながら手術の行方を見守りました。

ICVS東京クリニックでは手術室の隣にCTガイド室があり、ガラス窓を通して手術の過程を確認することができます。私はただ廊下で待っているだけでは心配で、一瞬、頭をCTガイド室に突っ込んで、ガラス越しに手術室の様子をうかがいました。

蓮見先生が使用していたのは、毛髪のような細く柔らかい注射針でした。それをCTの誘導下で、正確に病巣に刺していたのです。

――不思議だ、信じられない……。心のかたか度何度もつぶやきました。ちなみに、たとえ頭だけだとしても、部外者が医療関係者室

に立ち入ることは厳禁です。治療スタッフには厳しく注意されましたが、心配のほうが勝り、愚行を犯してしまったという次第。今思えば、とても恥ずかしい気持ちです。

Act3. 信頼の円で

今年（2019年）5月、日本で7か月間治療を受けた妻が、中国全景影像醫學センターでPET・CT検査に臨みました。病状の好転を期待していた私は愕然――。検査結果に、右上肺の2つのリンパ節に肥大を認めると書かれてあったのです。

居ても立つてもいられなくなった私は、国内の主だった専門医に、セカンドオピニオンを求めました。医師たちは口をそろえて「リンパ節の肥大は、薬物に対して耐性が生じた結果かもしれない。遺伝子検査をやり直して、治療効果の期待できる新しい薬物を探すべきだ」と告げました。

もちろん、蓮見先生にも意見を求めました。蓮見先生は「放射性肺炎の疑いがあります。臨床と合わせて、経過観察することが望ましいでしょう」とコメントしてくれました。

異なる診断意見をどう考えればいいのか？ 医師として冷静さを取り戻した私は、妻に地

元の病院で一層精密な検査を受けてもらいました。すると、血液の指標も正常で、腫瘍マーカーも下がっていることが判明しました。薬物の耐性も認められず、結果に記載されたなどの数字も、蓮見先生が考えた「肺炎の可能性」につながっていたのです。

私は蓮見先生の判断を信用することになりました。それを伝えたとき、子供のようにつつ妻の顔は、今でも鮮明に覚えています。

高い技術を要する難しい上行大動脈からの細胞注入が順調に行われたこと、そして、PET・CTの検査結果を正しく診断したこと……。私はICVS東京クリニックの技術力に信服させられたのです。

治療で日本へ出かけるとき、以前は必ず妻に付き添いましたが、現在は同行しないときもあります。妻はすっかり日本に慣れてしまいましたが、症状がほぼ安定しており、なんと、今年9月までのPET・CTでは、肺のリンパ節転移がなくなることが確認されたのです。

まだ治癒とはいえませんが、快方へ向かう兆しであることは間違いありません。2つの影が認められたものの、両方とも放射性炎症ということではとっています。もちろん、蓮見先生の医療チームの技術レベルの高さ、厳格で責任感のあるサービスが、われわれ患者と家族にとって、一番の安心感です。



▶ 2020年——蓮見賢一郎先生「地方講演会」の予定 ◀

米国法人蓮見国際研究財団理事長 蓮見賢一郎先生の2020年の講演予定が決まりましたので、お知らせします(19年12月現在)。今年は東京講演会(20年1月実施)以外、福岡で開催予定です。

蓮見先生が今年選んだ講演テーマは『がんを克服して人生を生き抜く』。人生100年時代のがん管理術を、ハスミワクチン、HITV療法をはじめ、免疫療法の最先端を踏まえて解説します。探していた知識・治療法に出逢えるかもしれません。ご家族、お友達とお誘いあわせのうえ、ぜひご来場ください。みなさまのお越しを心よりお待ちしております。

入場無料

■ 福岡講演会



日時：2020年11月14日(土)
開場 午後1時 開演 午後1時30分
会場：アクロス福岡
円形ホール
〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神1丁目1番1号
TEL 092-725-9113

- 西鉄福岡天神駅から徒歩10分
- 地下鉄空港線天神駅から徒歩5分(16番出口直結)
- 地下鉄七隈線天神南駅から徒歩7分(5番出口)
- バス停アクロス福岡・水鏡天満宮前から徒歩0分

● 本誌でお伝えした『蓮見賢一郎先生 広島講演会』は、都合により中止になりました。本件についてのお問い合わせは、永山医院へご連絡ください。

※お問い合わせ先 永山医院
TEL 082-221-2811 <http://www.nagayama-cl.com/>

Epilogue 思いやる気持ち

妻は日本で放射線治療、免疫療法、分子標的薬治療を受けましたが、副作用はほとんどありませんでした。まだ治療中ですが、樹状細胞の投与間隔が延び、妻も日に日に元気になっていきます。治療の合間に、私たちは東京周辺の観光スポットを巡りました。東京タワー、浅草寺など……。上野の恩賜公園にも行き、満開の桜を楽しみました。彼女が桜の下でポーズを取り、満面の笑みで写真を撮っている姿を見て、私は不覚にも涙をこぼしてしまいました。結婚30年以上の結婚生活において、最も困難な状況乗り越え、今ようやく治癒という希望が見えるようになってきたのです。

妻が病気になってからは、いくつかの友の会に参加しました。お互いに励まし合い、がん治療の経験を分かち合っています。

似たような境遇の患者さんに出会うと、私たちはいつもHITV療法について説明します。自分たちが経験した苦しみ、絶望感が、他の患者さんを思いやる力になってくれるのです。

日本での経験談が、がんで苦しんでいる患者さんや家族の人の希望になれば大変光栄です。

